京都「被爆二世・三世の会」会報

京都市中京区壬生仙念町３０-２
ラボール京都５階
京都原水爆被災者懇談会気付
ＴＥＬ075-811-3203
ＦＡＸ075-811-3213
ＨＰ http://aogiri2-3.jp

Kyoto Association of 2nd & 3rd Generation *Hibakusha*(Atomic Bomb Survivors)

２０２２年１１月１４日　増田正昭さんの「被爆者の肖像画」展　ギャラリートークの様子

被爆者の肖像画　５年目を迎えた増田正昭さんの個展　２
５１年前　京都では独自に被爆二世健診が行われていた　続報③　４
似島レポート　　庄田政江さん　６
『語り継ぐヒロシマ・ナガサキの心』(上・下巻)に寄せられた感想・書評　江崎ひろこさん　８
長崎訪問報告へのお誘い　　守田敏也さん　９
国内避難民の人権に関する国連特別報告者訪日調査を実現する会からのお礼と報告　１１
２０２２年被爆者をはげますつどいのお知らせ　１２
会員から会員へ・みなさんからのおたより紹介　１３
本・ＤＶＤ・映画・番組の紹介と交流　１５
「福島第一原発の汚染水はなぜ増え続けるのか」
「亜鉛の少年たち　アフガン帰還兵の証言[増補版]」
SCRAPBOOK／「核兵器禁止条約参加へ　豪労働党政権“重要な前進”」(しんぶん赤旗)　１７
「濃度測定の放射性物質絞る　東電　処理水放出で３０種に」(京都新聞)
「あの日の広島　残した写真記者　松重さんを漫画化」(中國新聞)
編集後記　１９
２０２２年１２月の行事カレンダー　２０

被爆者の肖像画　５年目を迎えた増田正昭さんの個展

１１月１４日(月)～２０日(日) Gallery Take two　の報告

京都「被爆二世・三世の会」会員の増田正昭さんの「被爆者の肖像画で被爆者の生きざまを語り継ぐ」個展が今年も開催されました。２０１８年に第１回を開催して今回で５回目。描かれてきた被爆者と被爆二世の肖像は３６人にのぼります。

今年度、２０２２年度制作された新作の肖像画は６人。被爆者４人と被爆二世２人です。真新しい作品が会場のギャラリーのメインコーナーに展示されました。写真撮影された昨年までの作品もすべて会場いっぱいに展示されました。

開催日初日には正午からギャラリー・トークと称したオープニング企画を開催。肖像画に描かれた被爆者、二世、関係者で当日参加された４人が、守田敏也さんの司会に応えて、被爆の体験、肖像画への思いを語りました。参加者は２５人でした。南方特別留学生のサイド・オマールさんについては「オマールさんを語り継ぐ会」の早川幸生さんがオマールさんの生涯についてお話しされました。「黒い雨」裁判の勝訴で被爆者手帳の交付を受けることになった浦上博子さんからも、自らの被爆体験と手帳交付に至るご苦労などが語られました。今回は二人の被爆二世も描かれ、出展されました。「二世・三世の会」の平信行さん、米重節男さんが参加され、それぞれに親の被爆の体験と、その親と自らの関係について紹介されました。ギャラリー・トークはＺＯＯＭを使ってオンラインでも配信されました。

個展には１週間を通じて約２００人のみなさんに足を運んでいただきました。昨年までの２倍近い来場者数です。とりくみの認知が年々広がっていることが伺われます。また京都、朝日、読売新聞各紙で報じられた効果も大きかったようです。

「絵を見ていると、描かれた人から語りかけられるような気持になります」といった感想を述べられる方もあります。増田さんは肖像画を描くとき、対象となる人とリラックスした雰囲気の中で語り合いながらデッサンを始めます。それがそのまま完成した作品に映し出されているようです。

「二世・三世の会」会員も交代しつつ会場の案内役を務め、みんなで個展を応援しました。増田さんは今後も被爆者と被爆二世の肖像画を描き続けていきます。被爆者と被爆二世の生き様を受け継いでいくために、私たち「被爆二世・三世の会」も支え続けていきたいと思います。

今年制作された６点の作品と説明コメント

■葛下友基さん(９５歳)

広島に原爆が落とされた時、広島工業専門学校(後の広島大学工学部)２年生でした。学徒動員で福山市にいましたが放射能が蔓延しているので２日後「救援隊」として広島に入りました。校舎の下敷きになった学生を救出するために千田町に行きました。兄(３年生)も下敷きになっていまして、救出されました。そのことで入市被爆者になりました。

悲惨なことを体験したので子どもたちにはそのことを話すことができませんでした。

■高東征二さん(８１歳)

原爆「黒い雨」被害者を支援する会　事務局長。

「黒い雨はもっと広い地域で降り、多くの人が内部被ばくした」と、国が４４年前に定めた援護対象区域に異を唱え、被爆者と認めさせるため、黒い雨訴訟の先頭に立ってきました。

■サイド・オマールさん(享年１９歳)

アジア太平洋戦争末期、大東亜共栄圏構想の下マレーシアから来日し、広島文理科大学で学んでいた南方特別留学生。原爆投下によって自らも被爆しながら市民の救護・救済活動に携わる。終戦を迎え、その後帰国途上の京都で急性原爆症を発症し、９月３日、懸命の治療にも関わらず京大病院で他界。大好きだった日本の童謡「夕焼け小焼け」の唄に包まれながら。左京区修学院圓光寺内で、イスラム様式のお墓に眠る。

「南方特別留学生サイド・オマールさんを語り継ぐ会」によって毎年、墓前祭と「オマールさんを語り継ぐ」展示会が営まれている。

■浦上博子さん(８６歳)

９歳、当時の尋常小学校３年生の時、広島の爆心地から西方１０㌔㍍の佐伯郡玖島村で黒い雨を浴びる。戦中から戦後へ、まともに食べるもののなかった辛い毎日を忘れることができない。晩年になって数々の病気を発症。２０２１年(令和３年)の広島「黒い雨」訴訟の結果を受けて被爆者健康手帳を申請、２０２２年(令和４年)８月交付。「私のような田舎にいた者にまで原爆の放射能は影響していた」その恐さを多くの人に伝えておきたい。

■平　信行さん(被爆二世・７１歳)

父親、母親ともに広島の被爆者。幼い頃から戦争体験、被爆体験をよく聞かされて育つ。６０歳定年退職とともに京都「被爆二世・三世の会」結成に携わり、今年１０周年。

９７人の被爆体験の継承を積み重ね、今、放射線被ばくの世代を超えた影響の真実に迫ろうとしている。

■米重節男さん(被爆二世・７３歳)

母親が広島で入市被爆の被爆者(２０１８年死去)。被爆２世として京都「被爆二世・三世の会」結成に参加。核兵器禁止２０１０年国民平和大行進で長崎・広島コースの通し行進者となり、核兵器廃絶を訴え、地域での原水爆禁止運動に取り組んでいる。２０１７年国連での核兵器禁止条約交渉会議に日本原水協代表団で参加。

２０２１年「語り継ぐヒロシマ・ナガサキの心」に、母親から聞き取った被爆体験記録を掲載。

５１年前、京都府では独自に被爆二世健診が行われていた！

続報③

■１９７２年７月１５日刊行『被爆二世　その語られなかった日々と明日』（深川宗俊／監修／広島記者団被爆二世刊行委員会編／時事通信社）に、当時の京都府の被爆二世健診とりくみの状況が著されていました。
その内容を以下に紹介します。（本書１９９頁～２０３頁を転載）

３ 先進的にとりくむ京都府など

京都の被爆者

「私は蜷川知事を内閣総理大臣より以上に信用し、尊敬しています。“被爆者を援護するのは国の当然の義務”と激励してくれました。国がやらないのなら自治体がやろうと約束、二世の健康診断をはじめ諸施策を講じてくれたのです」―　京都市伏見区のＵさんは、しみじみと革新府政の“ありがたさ”を語る。

Ｕさんの中学三年になる子どもは、学校の一般検査で“精密検査が必要”と診断された。「白血球が多いことなど予想もしなかったのですが、“くるべきものがきた”という気持ちもありました。知らなかったほうが・・・・・とも考えたのですが・・・・・」と、そのときの切なさと動揺を説明する。しかし“いまさらくやんでも仕方がない。問題はこれから。自分が元気な間にできるだけ決着をつけてやろう。見通しが立ったことに意義を見出そう”と、ショックではあったが、気持ちを引き立てた。先の知事選挙では蜷川革新府政を守るために走りまわり、さらに「京都原水爆被災者懇談会」の世話人として運動の広がりのために身を粉にして働いている。

この「原水爆被災者懇談会」というのは、京都で開かれた第十回原水爆禁止世界大会（昭和三十九年）に参加した被爆者を中心に、お互いの悩みを相談し合おうと作られた被爆者運動を進めるための集まりである。会則もなく会費もとらない。会長もなく、立命館大学の永原誠教授を代表に、二十人ぐらいの世話人が手帳の手続きなどいろいろな相談に乗ったり代行したりしている。日本原水協を中心とした被爆者完全援護法制定、被爆者救済運動と結び合って、被爆者独自の要求をかかげてたたかいを進めてきた。

国会で二世の問題が話題になり始めたのは、五年ほど前。

同市北区のＴさんの中学一年になる長女は、学校の健康診断で“精密検査の結果がわかるまで泳がないように”と注意され、結果が知らされないまま二学期に再検査がいい渡された。Ｔさんは「小学校のときは元気だったのに・・・・・結果の通知がないのは健康なのだ」と自分にいい聞かせてきた。次女は近くの病院で“白血球がちょっと多い”と診断され、男の子は二歳ごろから鼻血で枕を汚すようになった。血液検査の結果、白血球が二倍、凝固する時間が遅く、医師に“治りにくい病気だ。健康なときに検査を三ヶ月に一度の割合で行い、データをとろう”といわれた。

Ｔさんのご主人が被爆者。いまは寝たり起きたりの毎日だ。「“幼い生命が奪われた”というニュースで不安に襲われることが何度もあった。そのたびに“親の不安が子どもに移っては・・・・・原爆に負

けない子どもに育てよう”と思い直して元気にふるまった。それでも心の片隅をよぎる黒い影はどうすることもできない」と訴えている。

被爆二世対策の実施

「原爆投下は人類始まって以来の大虐殺と考える。原爆を投下した国に対して怒りと憎しみを持っている。被害者には当然戦争の責任者である国が(保護を)なすべきことだが、身近な市町村や府県があたたかい手をさしのべて諸種の対策を講ずべきだ。われわれは十分被爆者と相談する用意があるので、何でも相談して、実質的にどうしたらいいか申出てほしい」(四十年十二月、京都府議会での蜷川虎三知事の答弁)。

四十二年ごろから被爆者と京都府の責任者の会合などで、「被爆者には年二回の健康診断が法的に保障されているが、その後に生まれた子どもには何の対策もない」と被爆二世の健康診断を希望する声が出始めた。

「京都原水爆被災者懇談会」も「さいきん、子どもや孫の現在と将来にわたる健康の不安が年ごとに増大している」事実を府や市にぶつけ、「子弟の健康診断を協力して実施してほしい」と要求して、交渉を進めた。

京都府では、白血病や小頭症などはっきり原爆による症状とみられる臨床例は、発見されていない。しかし「親が希望するなら、少しでも不安を取り除くために、医学的な因果関係は抜きで考えよう」と、四十五年暮れに二世の府費による健康診断実施の方針が固まった。

四十六年二月の定例府議会で、新たに原爆被爆者二世の健康診断を行うための費用を含めて、原爆被爆者健康管理費として四百万円が計上された。さらに同年九月の補正予算で、八百人の健康診断を予定して実施の準備を進めた。

同年十月、府被団協などの組織を通じて二世の実態を把握するためのアンケート調査が行われた。約千百人の手帳所有者の五二％が回答を寄せ、七百六十人の子どもの所在がわかった。また実施については六百八十人の回答のうち二百六十六人が希望した。

「回収率は半分だが、用紙は手帳所有者全員に配っており、一家で二通配布した場合もあるので、子ども数は実数とそれほどかけ離れてはいないはずだ。希望しない理由は“一生面倒みてくれるのならともかく、今は元気なので・・・”というのが見受けられた。“そっとしておいてほしい”というのもかなりあるようだ」と、同府保健予防課はみている。

健康診断は一般検査と精密検査の二段階。一般検査は視診、問診、聴診、血沈、赤血球数計算など

で四十六年十一、十二の両月に府と京都市の二十二保健所で実施された。受診者数は百五人。“受けたいが学校を休ませるわけにはいかない”という人や検査結果に不安を持つ人もあって、受診者数は多くないが、手帳所有者の検診が二割程度であることを考えればまずまずの成績といえよう。精密検査は二十五人が受けた。

京都府は「今後は府だけの力では限界があるので、行政として国に働きかけている。とりあえず、精密検査結果で原爆の影響がわかれば社会保険で治療を行い、一度だけの検査では不十分なので二、三年継続させて、様子をみたうえで考える」方針を固めている。

四十七年度も一般検査三百二十人分十八万円、精密検査百三十人分三十三万八千円の予算を用意、夜間でも受信できるよう開業医など一般の医療機関に委託することも検討している。また京都府は教育費免除、奨学金制度の実施の要望に対して、奨学金については特別推薦の措置をとった。

“二世の問題は私たち親以上に考慮してもらわねば・・・・・”といてう親たちの願いが、革新府政の中で初めて花開いた。「これで満足とはいえないが、これを契機に二世への援護の手が全国に広がることを切望しています」―　蜷川府政を信頼しきったＵさんの表情だった。

似島レポート

２０２２年１０月２６日　**庄田政江**（大阪市平野区）

１０月２５日広島市被爆体験伝承の最後の実習のため広島に行きました。

平和資料館の副館長他２名といつもの担当者２名の合計５人の前でパワー・ポイントを使いながら４５分の伝承をしました。その後、一般人がするような質問をされて答えなければなりません。私はこれのために事前に想定質問を考えて、答えを用意していきました。

私はちゃんと答えようと思ってつい長く話したので「質問をよく聞いてコンパクトに答えるように」と注意されました。答えているうちに質問何だった？状態になったもので・・・

後日、指摘された部分を訂正し原稿を提出し、その後原稿は認定され認定書が送られてきました。

その日はプリンスホテルの金輪島が見える部屋をリクエストして宿泊しました。

１９４５年、暁部隊所属の父は金輪島いて、８・６に救護のため入市し被爆しました。生前父はこのプリンスホテルに泊まっていたので、金輪島を前に何を考えていたのか、同行してあげれば良かったと思いながら私も島を見下ろしていました。

翌朝、９時過ぎのフェリーで広島港から２０分で似島の学園桟橋到着。事前にお願いしていたボランティアガイド・郷土史家の宮崎氏にお会いし案内して頂きました。

第一検疫所

日清戦争終結（１８９５年）により帰還兵が持ち込むコレラなどの病原菌を防ぐため第一検疫所が創設された。しかし、後に弾薬庫や倉庫に転用される。その当時の桟橋の跡や焼却炉跡、検疫所の創設に尽力した後藤新平の像、臨海少年自然の家（ここで冊子を頂く）。

第一検疫所桟橋　後方の建物は似島学園

似島学園は戦後、森芳麿が原爆孤児を育成するため設立しましたが、現在は社会福祉施設になっています。

そして私が伝承の原稿に少し触れているアメリカのジャーナリスト、ノーマン・カズンズ氏が１９５１年にここを訪れています。彼が書いた記事によりアメリカ人が孤児を「精神養子」として金銭的に支援を始めたのです。正直私はこの美談は個人的な善意だけなのかなと疑問に思っていたのですが、戦後の困難な時代にアメリカから広島へ、そして似島への移動は大変だったろうと今回感じました。

１８９５年閔妃（みんぴ）殺害事件の首謀者らの検疫と逮捕も似島で行われた。翌年容疑者は全員容疑不十分で無罪。

第二検疫所

日露戦争終結（１９０５年）に伴い第二検疫所が開設される。

ロシア人俘虜収容所では最大２，３９１名収容。送られてくる捕虜は似島で検疫後、各収容所に送られた。

青島(チンタオ)戦争（１９１７年）におけるドイツ人俘虜５４０数名が大阪から移送され、似島で３

年間過ごすことになった。彼らは語学、機械工学などの講習会、演劇活動、広島師範学校においてサッカー、広島県物産陳列館で工業技術などの作品展を開催など活発に活動した。バウムクーヘンで有名なカール・ユーハイムも収容者の１人だった。

- １９３０年代半ば―馬匹（ばひつ）検疫所設置、軍用馬の検疫
- １９４４年～４５年―海の特攻である海上挺進戦隊（秘匿名：マルレ）の訓練基地設置
- １９４５年―深浦地区に半潜航攻撃艇（秘匿名：ハンセコ）訓練基地設置
- １９４５年８月６日　検疫所には薬品など約５０００人分が備蓄されていたので臨時野戦病院となり、午前１０時過ぎから原爆による負傷者が船で運ばれ、検疫所と説教所に収容される。すでにいた船舶防疫部や船舶衛生兵に加えてマルレの教育兵など応援兵が派遣された。

犠牲者の火葬は火葬場で１体ごと行われていたが、死体の山ができると馬匹検疫所の広場や空き地で十数体をまとめて火葬した。火葬も間に合わなくなり、壕を掘って死体を投げ入れ土葬にした。

１９４５年検疫所の隊長と兵士が「千人塚」を立てた場所から１９５５年２０００体の遺骨を掘り出し、平和記念公園の供養塔に納める。１９４７年１５００体を発掘し供養塔を建てる。

１９７１年５１７体と１００体分の骨灰が発掘され平和記念公園の供養塔に納める。（冊子には宮崎さんの船「宮多丸」で遺骨を運んだとあります。）

２００４年８５体が発掘され供養塔に納められた。

第二検疫所桟橋

２０日間の間に運ばれた負傷者は計１万人と推定され、生きて帰れた人は２０００人から３０００人と言われています。

- 広島平和養老館　原爆で家族を亡くして身寄りのないお年寄りの養護所
- 「原爆被爆者の診療の地」の碑　暁６１６５部隊の病院船衛生５３班所属メンバーが建立
- 宇品駅プラットホーム敷石モニュメント
- 検疫所前の桟橋
- 馬匹焼却炉跡、水路跡
- 慰霊碑　１９７２年建立
- 似島平和資料館　文書や写真を展示　ボランティアの拠点

当日は車だったので似島で見学可能な箇所を殆ど案内頂きました。知人は歩きだったので行けない箇所もあったそうです。宮崎さんは最近体力がなく車にしているとのこと。また他のボランティアの方になる場合もあるようです。

最後にマルレの訓練場所であった江田島の幸ノ浦に行きたいと話していたので、場所を教えてもらい写真を撮りました。数珠をロッカーに入れてしまったので、持参して拝むことが出来なくて残念でしたが、亡くなられた方のご冥福を祈って島を後にしました。

幸ノ浦

【参考資料】似島平和学習資料（少年自然の家）、似島とニノシマ（似島の歴史を学ぼう会）

『語り継ぐヒロシマ・ナガサキの心』〈上・下巻〉に寄せられた感想・書評

江崎ひろこさん(中京区)より

京都「被爆二世・三世の会」様

はじめまして。

このたび「語り継ぐヒロシマ・ナガサキの心」(上・下)を拝読いたしました。すみからすみまで読みましたので、１冊読むのに２０日近くかかりました！

私の父は最年少で特攻隊に行っていますが４月に怪我をして、９月に飛ぶ予定でしたが戦争が終わってしまい、生き残りました。母は学童疎開で美山のお寺に４ヵ月余り行っています。

戦争のことを書いた本は、今まで片っ端から読み、原爆で亡くなった中学１年生の女子達の日記などで、その悲惨さや、２０年４月にもうやめようかと話し合いがあった時に、天皇が「もう１回だけ勝利を見たい」と言ったために、継続せざるを得なかったことなど怒りに体がふるえます。

が、今回、ご本で知ったのは、被爆が子や孫にも及ぶことでした。長崎で、２才で被爆した知人の長女（昭和４５年生まれ）が１０才で白血病で亡くなり、知人は「娘は被爆していないから、なんで！？と今も思っている」と、当時言っていたのです。彼女も、子や孫にまで影響するということを、知らなかったのでしょうか。たしか、手帳は取得されていますが。

申し遅れましたが、私は全国初ステロイド禍訴訟の原告で、裁判終了後６冊の本を出版していますが、その内の４冊がかもがわ出版刊なのです。お世話になったなつかしい出版社ということで、今回ご本２冊に目を留めたのです。

しかし、本当に驚きました。ステロイドと原爆（放射能）がとてもよく似ているのです。

① 子や孫にまで害が及ぶこと
② 骨粗しょう症、白内障、内臓障害（ガン）
③ 麻酔が効き過ぎたり効かなかったりする

その他、いろいろな共通点があります。

原爆被害の人たちが、一つ羨ましいことがあります。それは活動がマスコミに取り上げられ、集会もさせてもらえることです。私たちステロイド禍は、平成１１年に皮膚科学会が大々的に禁止する旨を、マスコミにも出版社にも世間にも流しましたので、「ステロイド被害を考える会」なんて名称のものは会場を貸してもらえませんし、新聞社に集いの案内を載せてもらいたくても、してくれません。細々と、口コミで案内してゆくしかないのです。平成１１年まではそうではなかったので、４００人～１，０００人規模の集会も可能で、他県からもドッと人が来て、立ち見の人がたくさん壁に張りついていました。

８年位前、３年間、立命館大学で「社会問題を考える会」の授業があり（アスベスト、フロンガス、化粧品毒 etc)、ステロイドの害について話しましたら、選択科目だったので、学年の違う学生や、法学部の学生も沢山出席（裁判のことが知りたかったのでしょう）され、１，０００人以上の申し込みがあり、急きょ一番大きい教室に（１，０００人入れる）場を変更して、それでもぎっしりと学生が座り、一生けん命メモされていました。終了後の感想文も深刻なものが多かったです。

今私は「アトピーを防ぐ」活動をしています。発症前に正しい洗い方をすれば、薬が必要になる事態も避けられるからです。これなら皮膚学会に文句を言われません。

原爆との違いは、被害にあわなくてすむ方法がある、ということです。しかしそれに気づかない母親がどれほど多いことか。忸怩たる思いがありますが、早く気づいて！私のブログを読んで！祈るしかありません。

原爆の放射能は今でも空気中を漂って、ふりそそいできている、とのこと。とにかく大変な時代です。

縁のある人に伝えていこう。これは同じですね。皆様の今後のご活躍とご健康を祈っております。

追伸。我が家は三条商店街の近くです。『語り継ぐヒロシマ・ナガサキの心』〈下巻〉の中で、金魚屋、冷やしアメを売っていたという方がおられ、あのおばちゃん？と懐かしかったです。

では失礼いたします。

長崎訪問報告会へのお誘い

守田敏也(左京区)

ヨウ素剤を配ってよ＠京都と京都「被爆二世・三世の会」共催で、１０月２８日から３１日にかけて行った守田の長崎訪問報告会を行います。

- 日時　１２月１８日(日) １８時半より２０時半
- 場所　ひと・まち交流館 京都　第４会議室 及びＺＯＯＭのハイブリッド開催です。
- 京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町 83 番地の１　(河原町五条下る東側)
  TEL：０７５－３５４－８７１１
- 参加費　１０００円　会場・ズーム共
- ＺＯＯＭ申込フォーム
  https://forms.gle/YAU28Ua78DtzBC2E6
- 共催　ヨウ素剤を配ってよ＠京都 ・ 京都「被爆二世・三世の会」
- 連絡　０８０－２０５１－９０３９（萩原）
- 以下、チラシに載せた呼びかけの文章を転載します。

● 高橋眞司さんから聞いたＮＧＯ被爆問題国際シンポジウムのこと

夏の訪問に続き、１０月２８日より３１日まで、再び長崎を訪ねてきました。

今回は２９日に長崎原爆被災者協議会(被災協)の主催で行われた高橋眞司さんの講演会に参加することが一番の目的でした。

高橋さんは１９７３年、３１歳の時に長崎の大学に赴任されて以降、被爆者とともに長く歩みを続けて来られた方です。

今回、特に詳しく話していただいたのは、１９７７年に東京・広島・長崎で行われた「ＮＧＯ被爆問題国際シンポジウム」のこと。

日本被団協が国連に原爆被害の調査を求めたことから、国連に関係する世界の多くのＮＧＯ参加の下に行われたもので、なんと９，０００人の被爆者からの聴き取り調査が行われました。

調査に携わった方も４０００人。極めて大規模なものでした。この時、それまでの調査では表に出ていなかった被爆者のさまざまな切実な想い、生活の苦しさ、いかなる困難の中にあるのかなどが、リアルに浮き彫りになりました。

高橋さんもこの調査に全力で関わり、その後の報告書の作成、発表なども数多く手がけられました。長崎の被爆者の心に深く分け入るこの調査の過程で、高橋さんは長崎の被爆者運動をけん引されてきた多くの方と出会われました。

このころ高橋さんは、平和公園内にある被災協事務所からの帰り道に、いつも路面電車の終点からバスに乗って一番後ろの席に座りながら涙を流していたそうです。胸がキュンとなるお話でした・・・。

● 秋月辰一郎医師と「原普協」、そして碑巡り

また、長崎の被爆者運動を、医師として被爆直度の救護からはじめ、長く先頭で走ってこられた故秋月辰一郎医師のお話も伺えてとても感銘しました。

秋月医師や高橋さんなど、シンポジウムに関わった長崎の人々は、その成果を引き継いで翌年に「長崎『原爆問題』研究普及協議会(原普協)」を結成されました。会長は秋月医師でした。今回、その資料も京都に戻った後に郵送して頂きました。宝物のような冊子類です。

中でもシンポの報告書として作られた『被爆者の現在』(表面写真)は読みごたえがありました。

高橋さんのお話と共に、これらの資料や秋月医師の著作を通じて学んだことも報告します。(秋月医師がマクロビの知恵を活用されことも紹介します)

この他、今回は平和公園内にある碑も一つ一つ丁寧に回ってきました。最近になって米軍が大量の黒い雨が降ったことを隠していたことが明らかになった西山貯水池も訪れてきました。

さらに長崎市長の１９４８年から２０２２年までの平和宣言をまとめた本も購入してきました。それらも踏まえてご報告します。

この旅を通じて、長崎の被爆者運動の最も熱いもの、私たちが学び継承していくべき大切なものをつかんでくることができたと思っています。ぜひみなさんとシェアしたいです。またその中から、今一度、原爆とは何か、戦争とは何か、長崎は私たちに何を教えてくれているのか、考えたいと思います。

どうか報告会にお越し下さい。一緒に語り合い、考えましょう！

２０２２年１１月

ご協力を頂いた皆さま方へ
御礼と御報告

国内避難民の人権に関する国連特別報告者による訪日調査を実現する会
代表世話人　田辺保雄

前略

昨年８月に８０を超える団体の皆さまと一緒に外務省に国内避難民の人権に関する国連特別報告者による訪日調査を実現するよう申入れを行いました。

その後、「実現する会」を発足させたところ、この活動には、１４４もの個人団体の皆さまから、合計で 1,525,020 円ものご寄付を頂きました。

お陰様で、特別報告者の訪日調査は、９月２６日から１０月７日にかけて実施され、その間、特別報告者は、避難者、研究者等のヒアリングを実施されました。頂いたご寄付は、訪日調査中の特別報告者のアテンド、時間外の通訳、市民側からのヒアリングにおける提供資料の翻訳費用等に使わせて頂きました。

現在、特別報告者セシリア・ダマリー氏の「調査終了後のステートメント」が、国連高等人権弁務官事務所ホームページに掲載されています（原文は英語）。左のＱＲコードは日本語版となっていますので、どうぞご確認下さい。

日本語版ＵＲＬ・https://www.ohchr.org/sites/default/files/2022-10/20221010-Fukushima-PR-Japanese.pdf
英語版ＵＲＬ・https://www.ohchr.org/en/press-releases/2022/10/japan-support-those-displaced-fukushima-nuclear-disaster-must-be

また、来年１月８日（日）には、京都弁護士会館地階大ホールで報告集会をオンラインとのハイブリッド形式で開催します。詳細が決まりましたら、ご連絡差し上げますので、多数、ご参加下さい。

取り急ぎ、ご報告と御礼まで。

敬具

２０２２年
被爆者をはげますつどい
&
被爆者のみなさまと参加者との交流

＜と　き＞　12月17日(土)　午後1時30分～3時

＜ところ＞　ラボール京都ホール　【労働者総合会館】

プログラム
- ♡ 団体、実行委員会から見舞金やプレゼントの贈呈
- ♡ 子どもたちのかわいいうたごえなど・・・

2022年被爆者を励ますつどい実行委員会
実行委員長　渡辺　賢治　☎075－811－3203

……

参加お申し込み　FAX送信先　075-811-3213

【おところ(行政区だけで結構です)】(　　)

【おなまえ】(　　)

……

ネット配信でもご視聴いただけます。

右のQRコードからZOOM配信参加にお申し込み下さい。
お申し込み後ただちにZOOMアクセスURLをお知らせします。

被爆者をはげますつどい2022 申込QRコード

会員から会員へ　✿　みなさんからのお便り紹介

他地域の２世・３世の方からいただいたお便りも紹介いたします。

■石田信己さんのお墓参り、他

守田敏也（左京区）

お知らせが二つあります。

一つは１０月２６日が、私たちのお仲間の石田信己さんの命日でした。当日には集まれませんでしたが、２７日に、平さん、奥田さん、米重さんと守田でお墓参りに行ってきました！毎年、この頃に訪れていますが、今回はいろいろなことが重なって来られなかった方がいつもよりちと少なかったですね。

石田さんが亡くなられたのは２０１７年のこと。享年６８歳でした。もう５年。早いですねえ。・・・いつまでも石田さんと一緒に歩んでいきたいです！写真を添付します・・・。

もう一つは健康調査アンケートをめぐる検討会について

１１月３日午前９時半から、いつものラボール京都で行いました。何人かの方に、あらかじめ１７通ぐらいのアンケートを読んでいただいて上で、どう集計し、集約するのかを検討しています。参加していただきたい方を例会で決めましたが、「自分も参加したい！」と言う方はもちろん大歓迎ですのでお知らせしておきます。

以下は個人的なお話です。

東京で原発・核燃からの撤退を求める対政府交渉に参加してきました。司会をおおせつかり、なんとか役目を果たしました。全国から７０人ぐらい来てたかなあ。国会議員も１０人ぐらい参加。菅直人氏や福島みずほ氏はじめ、議員のみなさん、かなり強く原発は絶対ダメ！と声をあげられてました。また全国各地(北海道、福島、新潟、福井、鹿児島など)からもたくさんの方が集っていて、熱気が凄かったです。六ヶ所村の再処理工場の危険性も大きくクローズアップされました。これについてはまたご報告します。

政府の側も、経産省、文科省、内閣府や原子力規制庁、復興庁、消防庁などなど、いろいろな若手官僚たちが出てきました。お昼過ぎから４時間、みっちりと交渉を行い、なかなか有意義でした。原発反対の声をもっともっと高めなくてはです・・・。

■広島をテーマにした京庫連平和文庫読書会

池村奈津子(伏見区)

いつも会報をありがとうございます。

先月は京庫連平和文庫読書会で広島をテーマにしました。

京庫連では、長年「戦争と平和を考える本」をリストアップしてきましたが、２０１１年以降の本から、広島原爆に関する児童書を抜き出し並べてみました。これらの本を読みながら、「伝える」ということの大切さを痛感しました。

中島晶子さん『１４歳のひろしま　ワタシゴト』や『１４歳のひろしま２　あなたがいたところ』、指田和さん『ヒロシマ消えた家族』、『ヒロシマ消えた家族のあしあと』、朽木祥さんの『光のうつしえ』、『八月の光』などなど、関連本がたくさんあります。いろいろな形式で、またいろいろな角度から書かれた本ですが、大人が読んでも心に響きます。

こうした物語を子どもたちが読んでくれればよ

いのですが。
機会がありましたら京庫連平和文庫に一度お出かけ下さい。

■神奈川県の慰霊祭の準備に関わって

門川恵美子(神奈川県原爆被災者の会二世・三世支部)

あっという間に夏は去り、１２月のような日もあるという、何だか待って待ってと季節を追いかけるような日々でもありますね。お元気でお過ごしですか。大変遅くなりましたが会報をＢＣＣでお届けすることをご了承お願いします。

今年から慰霊祭の準備に７月から１０月までかかわりました。親支部から私たちの支部に引き継いでほしいという願いに応えるためです。改善したほうがいいと思うようなこともありますが、市町村長、議会議長、友好団体のみなさんのメッセージが８０通近くも届き、巻紙だったり、きれいな紙につつまれていたり、Ａ４2.枚の長い文章だったりをみると被爆者先輩たちがはたらきかけて、認知をかちとってきたご苦労がしのばれて大切な行事であると感じられました。

またお会いしたいですね。

■早朝ラジオ体操と被爆二世健診

平　信行(南区)

１１月８日(火)、私の住む町内で早朝ラジオ体操を続けてきて１周年を迎えました。朝６時３０分から、ラジカセを持ち込み、ＮＨＫラジオ放送に合わせて１０分間。正月３ヶ日と雨天の日以外は一日も休まず。参加者は毎日１０人前後。始めた頃はいつまで続くものかと思っていましたが、今ではすっかり日常生活の中にはまり込んでしまっています。

健康のためでもありますが、何よりご近所さんとのコミュケーションの場となっているのが貴重。

１１月１５日(火)は私の「被爆二世健診」受診日でした。国が辛うじて続けている唯一の被爆二世支援事業だと思うので、その火を消してはならない、その思いだけで、ほとんど義務感で毎年受診を続けています。

しかし、健診内容はまったく不十分。血圧、身長・体重、採血、採尿、そして医師による触診だけ。これでは現役世代など勤め先の健康診断の方がよっぽど充実していて、わざわざ休みをとってまで二世健診を受けようとは思わないでしょう。

少なくとも被爆二世も被爆者(一世)と同じようにガン検診が保障されるべき。被爆二世(三世も)も被爆者援護法の対象範囲にすべきです。

野間優子さん(吹田市)から寄せられた
絵葉書

本・DVD・映画・番組・その他の紹介と交流

■ 福島第一原発の汚染水はなぜ増え続けるのか　　地学団体研究会

紹介　石角敏明（長岡京市）

皆さんは「地学団体研究会」ってご存じでしょうか？この団体、２０１４年、福島第一原発の汚染水問題のシンポジウムを開催したり、学術雑誌「地球科学」で汚染水問題の特集を組まれたりで、地団研全体で汚染水問題を取り組んでこられたようです。

このブックレットも「汚染水」問題について、大変わかりやすく、おもしろい、また頒価も安い。地学の専門家集団が書かれているので「難しい」という印象だが、やさしくわかり易い。「なぜ凍土壁」が失敗したのか、その原因はどこにあるのか、を誰にでも分かるように解説されている。そして、「汚染水」を海洋放出することの危険性。「汚染水」をどのように減らすのか、中期・長期に渡っての提案もされている。専門家集団だけに、福島第一原発の土質構造も正確に調べ解説されているが、全てが非常に具体的でわかりやすい。それも現在の技術で出来ることを紹介されている。一方で国・東電の「情報隠し」「調査不足」については厳しく糾弾されている。

学習会等の資料に十分役立つ、講師を呼ばなくても自分達だけで読んで学習できる内容である。「１冊１００円」で「１０冊以上」頼むと送料無料になるそうで、ぜひ学習会等で活用してほしいと思います。「地学団体研究会」のＨＰより申し込める。

■ 亜鉛の少年たち　アフガン帰還兵の証言［増補版］　スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ　著　奈倉有里　訳

紹介　平　信行（南区）

この本の解説について、訳者のあとがきの一部をそのまま紹介する。下手な私の書評ではとても的確な解説などできないから。

本書４３１ページ後から３行目から

１９７８年にアフガニスタン人民民主党による共産主義政権が成立すると、ソ連はそれを「革命」と呼んで歓迎した。しかし人民民主党内部で政争が起き、各地で反乱が相次ぐ。１９７９年、ソ連はアフガン政府軍を支援し反乱を抑えるという名目でその政争に介入し、軍を派遣する。だがソ連国内に向けた情報では、ソ連軍は「国際友好の義務」を遂行しており、兵士たちは植樹をし、現地の住民に物資や医療を提供しているとしていたこの派遣の、その「看板」とはかけ離れた現実が徐々に明らかになって

いく。高校を出たばかりの何も知らない少年たちが次々に戦死し、母親たちのもとに亜鉛の棺となって届けられる。棺の素材として亜鉛（亜鉛メッキのなされた鋼板）が用いられていたのは、長時間を要する保存と輸送を見込んだためであった。その多くは本書にも登場したように完全に密封され、故郷に戻ってきても家族が開けることは許されなかった。決して開かない「亜鉛の棺」は、どうやら得体のしれない恐ろしいことが起こっているらしいアフガニスタンの戦争をさす代名詞となっていく。さらにアレクシエーヴィチは「亜鉛」に、「(少年たちの）心が殺され、精神が金属のように鉛のようになってしまった」という意味も込めている。

岩波書店　3,200 円(＋税)

少年たちを現地に赴かせた動機は、ソ連が建前として吹き込んだ「国際友好」の「理想」だったり、第二次世界大戦の参戦者を英雄視する軍事教育だったり、ソ連には売っていない外国製品を得ることだったりといろいろだが、なかには(とりわけアフガニスタン戦争の実情がわかってきてからは)決して行きたくなかったのに騙されて強制的に連れていかれた例も少なくない。ソ連に戻った「アフガン帰還兵」は、次第に明らかになったその「政治的過失」の恐怖とともに、社会から断絶されていく。以下略

１９７８年、ソ連はアフガニスタンに侵攻。その戦争は１９８９年まで、１０年に及ぶ。ソ連側は１４，０００人以上が戦死し、アフガニスタン側はその数倍の戦死者を出したと言われている。ベラルーシの作家スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチはソ連のアフガニスタンからの帰還兵や看護師、戦死した若者の家族(母親や妻、子ども)、恋人、婚約者を取材し、その声をあるがままに描き出して、アフガニスタン戦争のあるまじき、想像を絶する非人間的な実態を暴き出していく。

帰還兵たちの語るのは、軍隊内の陰湿ないじめ、無残な戦死者と体の一部を失った負傷者の姿、軍隊に蔓延する麻薬、兵士の自傷行為や自殺、アフガニスタンの集落で子どもや乳飲み子を手榴弾で殺した心の痛み等々だ。戦場だけではない、棺に入って帰ってきた我が子をすぐには受け入れることのできない母親、何年も息子の墓に通い続けた母親など、遺族の深い嘆きと怒りも語られる。

さらに残酷なのが、社会の帰還兵に対する冷酷な態度。汚れた手になったといって恋人に去られた兵士、税関で兵士から持参品を没収し、下着だけにする官吏。視力を失っても夢の中では目が見えるから恐怖が続くという兵士。社会は彼らを「アフガン帰り」といって遠ざける。遂には「戦場に戻りたい」と彼らに思わせるほど世間との溝は深い。

本書の表紙に描かれたまだ初々しい少年兵の写真が痛ましい。

ソ連のアフガニスタン侵攻は今から３０年以上も前の出来事だが、ここに著されたドキュメンタリーは、今に通じる、さらには戦争というものすべてに通じる告発として訴えてくる。かっての日本の犯したアジア・太平洋戦争、アメリカのベトナム侵略戦争、近年のイラク戦争、アメリカによるアフガニスタン戦争等々もそうであったように。今また、ロシアのウクライナ侵攻に際して、戦場では、兵士を送り出した家族の間では、同じ苦しみ、悲しみを生みだしている。それは想像に難くない。かっては同じソ連邦であったウクライナとロシアという関係もあり、ロシアの人々、ウクライナの人々を頭に描きながら読み進める一冊となった。

Scrap book

■核兵器禁止条約参加へ　豪労働党政権“重要な前進”

ＩＣＡＮ（核兵器廃絶国際キャンペーン）は１５日、同団体ホームページで中道左派の労働党が政権を握るオーストラリアが、今年の国連での核兵器禁止条約関連決議案の投票で前政権とは違う行動をとったことについて、「小さいながらも重要な前進だ」と評価・歓迎しました。同労働政権に野党時代の公約約通り核兵器禁止条約の署名・批准を実現するよう呼びかけました。

国連総会第一委員会（軍縮・国際安全保障問題）では、１０月２８日に核兵器禁止条約の署名・批准を呼び掛ける決議案の賛否が問われ、オーストラリアは棄権しました。ＩＣＡＮは、オーストラリアが棄権したことについて、同国が条約に５年間反対してきたことを「公式に終わらせた」ものだと、意義を強調しています。

野党時代の公約

同条約は２０１７年の国連総会で採択。１８年から毎年、条約の署名・批准を呼び掛ける決議案が提出されてきましたが、米国の「核の傘」に入る同盟国であり保守連合政権だったオーストラリアは、昨年まで反対を投じ続けていました。

同国は今年５月の総選挙で当時最大野党だった労働党が勝利し、政権交代。労働党は、２１年の党大会などで、「効果的な検証制度と法執行の構造、核不拡散条約（ＮＰＴ）との整合性および普遍的な国際社会の支持を確認する必要性を考慮し、核兵器禁止条約に署名・批准する政権を約束する」ことを確認しています。

今年６月にオーストリア・ウイーンで開かれた同条約第１回締約国会議では、オーストラリアの労働政権は、野党時代に政府に求めていたオブザーバー参加を実現しました。

英紙ガーディアンのオーストラリア版によると、オーストラリアの隣国のニュージーランドやインドネシアの政府高官は、「前向きな動きを見ることができてうれしい」などと述べ、オーストラリアが棄権を選択したことを支持しています。

ガーディアン紙は一方で、米国の意見として駐豪米大使が、核兵器禁止条約は米国の核の傘を含む「拡大抑止」を認めていないと批判し、支持できないとコメントを紹介。オーストラリアが同条約に参加することについて、米政府が「警告」していると報じています。

世論は賛成多数

ＩＣＡＮオーストラリア代表のジェム・ロムルド氏は、「オーストラリア政府は、オーストラリア国民の意思に基づいて条約参加について、自ら決定しなければならない」と強調しました。

同氏は、３月の国民への世論調査では、７６％が核兵器禁止条約の署名に賛成していることを紹介し、「軍備縮小への前進は、より緊急となっている」と訴えています。

（２０２２年１１月１７日　しんぶん赤旗）

■濃度測定の放射性物質絞る　　東電　処理水放出で３０種に

東京電力は福島第一原発でたまり続ける処理水を海洋放出する際、基準を満たしているかどうかを確認するため濃度測定する放射性物質を選び直し、３０種類とする方針を示した。これまでは多核種除去設備（ＡＬＰＳ）で除去可能な６２種と、炭素１４の計６３種を対象としていた。

ＡＬＰＳで除去できないトリチウムは別途測定する。今回除外した種類も自主的に測定し、データ公開は続けるという。原子力規制委員会に審査申請しており、選定結果に問題がないかを今後、規制

委が評価する。

東電によると、福島第１原発で継続的な分析がなかった放射性物質１１種について、建屋にたまる汚染水や、汚染水を浄化した処理水中の濃度を追加測定し、約千種から改めて選んだ。従来の６２種のうち、濃度が非常に低くなったり、汚染水に溶け出しにくいと確認できたりした３７種は除外できると判断した。

一方で、ウラン２３８など現在も汚染水中に一定の濃度で含まれると分かった４種を追加し、計３０種とした。追加した４種について、東電の担当者は「浄化後の処理水からは検出されていないが念のため加えた」と説明している。今後、溶融核燃料(デブリ)の取り出しが進むと汚染水の性質が変わる可能性があるため、このほかに塩素３６など６種を新たに年１回測定し、変化を監視するという。

ＡＬＰＳで除去する放射性物質は、２０１１年の事故直後の汚染水に含まれる主要な物質を調べた上でセシウム１３７など計６２種と決まった。その後、炭素１４の分析漏れが分かり、１９年になって新たに確認対象に加えた経緯がある。規制委が海洋放出前の再検証を求めていた。

（２０２２年１１月２０日　京都新聞）

■「あの日」の広島　残した写真記者　本社　松重さんを漫画化
戦前カメラ　作画に現実感

原爆投下当日の広島を撮影した元中国新聞社カメラマン松重美人（よしと）さん（２００５年に９２歳で死去）を描いた漫画「涙で曇ったファインダー」を中国新聞社が制作した。創刊１３０周年に合わせて企画した。

中国軍管区司令部報道班員でもあった松重さんは原爆が落とされてすぐ、カメラを携え、広島市翠町（現南区）の自宅から市中心部へ向かった。近くの御幸橋などで撮った５枚は、被爆当日の惨状を伝える貴重な資料として知られる。

後世に伝えるため撮らなければと思う一方、あまりのむごさにシャッターを押せない―。そんな松重さんの葛藤にも迫り、広島市安佐南区の漫画家くぼなおこさんが１７ページの物語を優しいタッチで描いている。

今夏公開した「声の新聞　力の限り」に続く２作目。全４作品を制作し、年内に発行する冊子「まんが　被爆地の新聞社」に収録する。

漫画「涙で曇ったファインダー」の作画には、広島市西区に住むカメラ収集家の菅原博さん（８３）が協力した。松重美人さんが携えた国産の蛇腹カメラ「マミヤシックス」。戦前製造の同カメラを所蔵する菅原さんは、豊富な専門知識で詳細な作画表現を支えた。

マミヤシックスは１９４０年発売開始。戦前はボディー前部のファインダーの形状や数に特徴があり、戦後のシリーズとは違っていた。フィルム面を前後に移動させてピントを合わせる独自のバックフォーカス機構を採用し、「使いやすく鮮明な写真が撮れた」と菅原さん。所蔵するマミヤシックスは高さ１１センチ、幅１４・５センチ、重さ７５０グラム。コンパクトかつ丈夫で持ち運びに適していた。

松重さんは当時の撮影ネガを終戦間もない頃に現像して保管する一方、愛用のカメラは買い替えのため手放した。２台目となった戦後製造のマミヤシックスは原爆資料館（中区）に寄贈されている。

中国新聞社は今回の漫画化に当たり、昭和期のカメラなど約３５００台を所蔵し、著作もある菅原さんに協力を依頼した。作者のくぼなおこさんも「作品のリアリティーを高めることができた。当時の雰囲気をより鮮明に感じてもらえる」と話す。

広島市重要有形文化財に指定された松重さんのネガ５点。その写真を展示する中区の中国新聞社１階ロビーに、菅原さんのカメラも近く加わる。６歳の時、原子雲を現安芸高田市から目撃した菅原さんは「懸命にシャッターを切った松重さんの思いをカメラからも感じ取ってほしい」と願う。

（２０２２年１１月１５日　中國新聞）

編集後記

▼増田さんの「被爆者の肖像画」個展、たくさんのみなさんに来場いただいてとても良かったです。会場のギャラリーはいろいろな出会いの場でもありましたね。被爆者や二世・三世のみなさんはもちろん、新聞各紙の記事を見て来場された人、増田さんの作品目当てにわざわざ広島から駆けつけられた人、サイド・オマールさんを語り継ぐ会のみなさん、何年かぶりに学生時代の先輩、後輩とばったり出会った人たちも。考えてみると集会やデモなどではバタバタと忙しく行き交う人々とも、こうした会場で絵画作品を前にして、じっくりと語り合う機会はそう多くはなく、貴重なひと時になっていたのではないかと実感しました。▼「二四・三世の会」の会報にも「本・ＤＶＤ・映画・番組・その他の紹介と交流」のページを設けています。毎号、本の紹介が主になっていますが、もっと多様に多彩に文化、芸術の交流ができないものかと思います。みなさんの投稿を期待します。（平）

２０２２年 12 月（師走・しわす）行事カレンダー

月	日	曜	行　　事
１２	１	木	
	２	金	*世界初の人工的核分裂連鎖反応に成功した日(1942 年・シカゴ大学)* キンカン行動
	３	土	
	４	日	人権週間(→10 日)
	５	月	
	６	火	６・９行動 大飯原発運転差し止め訴訟第 35 回期日(13 時 40 分・京都地裁)
	７	水	原発賠償京都訴訟控訴審第 16 回期日(14 時 30 分・大阪高裁)
	８	木	*太平洋戦争開戦(1941 年)*
	９	金	６・９行動　キンカン行動
	１０	土	不戦のつどい(14 時・京都市職員会館かもがわ) 臨時国会会期末
	１１	日	
	１２	月	
	１３	火	*南京大虐殺(1937 年)*
	１４	水	
	１５	木	
	１６	金	キンカン行動
	１７	土	被爆者をはげますつどい(13 時 30 分・ラボール京都とオンライン)
	１８	日	
	１９	月	安保法制廃止をめざす 19 日行動(18 時 30 分・京都市役所前)
	２０	火	
	２１	水	京都「被爆二世・三世の会」12 月例会と忘年会(18 時 30 分・K ハリーナ) *韓国総督府設置(1905 年)*
	２２	木	冬至
	２３	金	キンカン行動
	２４	土	
	２５	日	クリスマス
	２６	月	
	２７	火	
	２８	水	
	２９	木	
	３０	金	キンカン行動
	３１	土	大晦日